



No. 101

全国図書館大会岡山大会の
分科会に参加して

第一分科会（公共図書館分科会）

玉野市立図書館 難波悦子

今年度の異動で公共図書館司書一年生（一般室担当）となりました私は、公共図書館の活動についてしっかり勉強しなければという思いから、第一分科会に参加いたしました。

「くらしに生きる図書館をめざして」兵庫加藤市中央図書館長直井勝氏による実践報告では、開かれた図書館にということから職員と三つの約束をされたということでした。

「フロアでのウロウロ歩き」については、自館の図書資料について知っておくという点が必要です。レファレンスで困っている私は返却本の配架時がそれに当たりますが、一冊でも多くの資料に触れるようにしています。また、「カウンターでのニコニコ顔」の実践では、お客様か

ら「この人は明るくていい」という言葉をよくいただいています。

続いて「図書館の危機管理」群馬県草津町立図書館主査中沢孝之氏による発表では、「公共図書館においてもここまで考えておかなければならないことなのか」と衝撃を受けました。早速当館でも話題にしました。

以前より気がかりだった利用者の個人情報保護ということから、図書館利用者カードを忘れた方に《氏名・自宅電話番号》を記入していただく用紙を準備しました。また、筆記具以外の文具は出しっぱなしにしないことや設置場所の悪かった来館者用ロッカーは、利用しやすく死角にならない位置に移動しました。

現在、日々の仕事をこなすのが一杯という状態の私ですが、今大会のテーマにもあるように、図書館の可能性が広がるよう利用者の声に耳を傾け、図書館の基本的なサービスとは何かを考え、そして、くらしに生きる図書館活動を求めていかなければならないと思っています。

学校図書館分科会は、今大会の中で最も多くの参加者があり、大盛況だったようです。このようにこの分科会に多くの方が関心を寄せられたのは、岡山が学校図書館先進県と言われ全国から注目を集める存在であること、そして、分科会の内容も期待に反しない魅力的なものであったからではないでしょうか。読書科の指導で有名な関西学院高等部の宅間先生のご講演のほか、ワークショップや各種の事例発表が有り、学校図書館関係者が「今」抱えている問題に何かしら答えてくれるような、現場を反映したプログラムが用意されていて、大変充実したものであったと思います。

第三分科会（学校図書館分科会）

岡山朝日高等学校 笠原和美

私が参加した第三分科会では、中学校と高等学校の二つの事例発表が行われました。いずれも学校司書によるものでしたので、とても参考になりました。また、質疑応答では、

教諭のお立場からの言及もあり、司書と教諭の協働についても考えさせられるものでした。機会があればこうしたテーマでも研究を深めたいものです。ほかの分科会においても、すぐに役立つワークショップや意欲的な取組についての事例発表があり、

参加者から好評を得たと伺っています。基調講演では、学校図書館の役割について、宅間先生ご自身の体験からのすばらしいご示唆をいただき、改めて学校図書館の役割を考える機会となったように思います。

岡山大会を通じて、「学校図書館にできることは何か」と自らに問いかけながら、日々実践を重ねている岡山の学校図書館関係者の様子が全国からお越しになった参加者に伝わったことと思います。優れた実践を共有することで、さらなる学校図書館の可能性が広がったことと確信しています。今大会で得たことを糧に図書館の大きな可能性を信じて、多くの方々と共にまたがんばってきたいと思っています。大会運営に当たられた関係者の皆様、ありがとうございました。

ボランティアのつどい
図書館に期待すること
参加者 高木唱洋

昨秋、全国図書館大会岡山大会「ボランティアの集い」に参加した。その機会に図書館について考えたことを述べて見たい。

一、図書館とボランティアの関係
大会では図書館を支えるボランティアの活動内容や事例報告があり、

図書館にとって欠かせない役割を担っていると思った。その一方で図書館がボランティアをどう支えていくかという視点の報告が見えなかった。

ボランティアの活動を図書館としてどう位置付けし、そのため支援、例えばスキルや技術向上のための支援、地域での活動を拡大、発展していくための支援が必要と思った。即ち、ボランティアが図書館へ、と同時に図書館がボランティアへという双方向的な協働関係を創り出すことが必要ではなからうか。

二、本の水先案内を！

出版物の大洪水の中で、時間の試練に耐えて生き残る良書が見つげにくくなった。古典教養主義も大切にしたいのだが、変化が激しく生きにくい今を見定めていく本が求められている。昨年、北海道の本屋が「中学生はこれを読め！」という企画をして大きな反響があった。本のプロとして、さらにボランティアや図書館利用者の力も借りて本の水先案内の活動をしてほしい。例えば、「保育者はこれだけは読んでおけ！」「科学ばなれの生徒にすすめる」「夏休みは自然に出会うチャンスだ！」「魂を洗うための詩歌への誘い」「時代の底流をさぐる」など、広く世間に発信してほしい。

三、図書館へ来ない人へのアピールを！

本が読まれなくなった、と言われて久しい。昔に較べれば蔵書は充実し、サービスも向上し、利用する人にありがたい時代だ。しかし、私が期待したいのは本の世界を伝えること、読まない人への働きかけである。ボランティアも図書館の組織として位置付けし、技術の向上に投資し、保育園、幼稚園、小中学校に働きかけストーリーテリング、ブックトークを展開する活動を発展させて欲しい。予算を蔵書を増やす事に集中させないで、時間の淘汰に耐える本を広く県民にアピールして読者層を拡大する活動に使うて欲しいと思っている。「人類の知的財産」に関わる仕事をしているという気概と行動力に期待する。

市町村合併後の図書館

●倉敷市

市町村合併後の真備図書館より
平成十七年八月一日、吉備郡真備町と浅口郡船穂町は倉敷市と合併し翌年四月一日には倉敷の六図書館・図書室とのオンライン化を完了、同じサービスの運用が始まりました。真備では約九万冊、船穂では約三万冊あまりの中から蔵書検索をしていましたが、一気に約百二十万冊からの日常的な検索が可能となりました。

た。予約購入で待たせることも減り、真備では手間と時間をかけていた相互貸借を三分の一に削減できました。在庫であれば翌日には本が届き、より早い資料の提供ができるようになりました。予約数も真備は三倍強、船穂は二十倍強と大幅に増えております。新刊図書についても、より早い発注を目指し、図書予算もなんとか維持できております。しかし、最近のアンケートで「便利になったが新刊の読みたい本がなかなか回ってこない。」という率直な意見をいただきました。予約の多いものが落ち着くまでは、予約しない限り、なかなか目につかないという競争社会に組み込まれたわけで、合併後の利用の仕方をよりアピールしなければいけないと痛感しております。雑誌は、地区館との調整により、残念ながらタイトルの数は減りましたが、結果的にはより多くの種類から選べるようになっております。図書貸出し冊数も真備では九冊から二十冊になり、児童書の利用も大幅に増えました。視聴覚の貸出しも始まりました。両館共新築六年目の新しい図書館ですが、真備は視聴覚コーナーが充実して利用も蔵書も多くありました。しかし、クラシックに比べ、新しいものやポピュラーなものが少ないので、徐々に増やしていく予定です。また、

自宅のパソコンや携帯、図書館の利用者用端末から自分で予約ができるようになりました。インターネット体験コーナーはそれぞれ四台・二台と、地区館の中でも充実しています。時間延長も木曜のみ午後七時まで開館するようになり、祝日開館も始まりました。移動図書館も運行され始めました。ボランティアとの協力や行事も増えております。地域の住民に今まで以上に満足してもらえよう、毎日のおはなし会などを継続して、気軽に来館できる充実した図書館を目指しています。

(倉敷市立真備図書館 河内文子)

●井原市

平成十七年三月一日、井原市は後月郡芳井町と小田郡美星町を吸収合併し、新生井原市として新たな一歩を踏み出しました。平成十八年十二月末現在、面積二四三・三六km²、人口四六、六〇四人で、県西南部の中心都市として合併に寄せる住民の期待は大きなものがあります。しかしながら高齢化率は二八パーセントを超え、県平均をも大きく上回っており、高齢者対策は市施策の大きなウエイトを占めることになりました。

図書館については、合併協議の中で井原図書館を本館とし、芳井図書館を分館、美星公民館の図書室を井

原図書館の分室とすることで合意し、住民が何処の図書館(室)でも利用しやすいよう、図書館利用者カードの統一と資料の配送システムの構築を図ることにしました。資料配送システムは市役所が行う週二回の支所間連絡便を利用することとし、利用者カードについては、井原図書館と芳井図書館で異なる図書館システムを導入している為、それぞれの館で登録をする必要がありますが、利用者サイドからすると少なからず利便性は向上したものと思われまます。また、移動図書館車を芳井地域・美星地域に毎月それぞれ二日間ずつ運行し、全市域を網羅することとしました。図書館まではなかなか出かけにくい周辺部のお年寄りや、小さなお子さんたちに喜ばれています。

そのような中、平成十八年四月一日には旧美星町役場三階の議会フロアを改築し、それまで公民館にあった美星図書室を移転し、美星図書館として開館しました。町議会時代の調度品は出来るだけそのまま利用することとし、ゆったりと落ち着いた閲覧空間(写真)は利用者好評を得ていますが、蔵書数が現在約一万一千冊と非常に少ない為、今後重点的な整備が必要と思われまます。市立図書館の今後の有り方については、平成十八年秋の第三期井原市



教育審議会の答申を受け、今後中央図書館の建設計画を含めた具体的な実施計画を作成することになりましたが、答申の展望にも謳われているように、住民が気持ちよく気軽に利用できる図書館にする為に、三館が連携を密にし、それぞれが地域に根ざした特徴ある図書館として成長していくよう、職員一同知恵を出し合って頑張っていきたいと思ひます。

(井原市図書館 渡辺良信)

●総社市

総社市図書館は、昭和五七年に、三万冊の蔵書で開館しました。市中心部に位置し、市役所に隣接するという立地条件の良さもあり、着実に利用者を伸ばし、市民に親しまれる

図書館として、発展してきました。現在は約十八万冊の蔵書を有しています。

平成十四年三月には、一階開架部を一三二㎡増築し、「えほんのり」を設け児童サービスの充実を図ると同時に、パソコンコーナーを設置し、インターネットサービスを始めました。また、昭和五八年から移動図書館車による巡回サービスを行っており、合併後旧清音村・旧山手村にも区域を広げ、現在は三六ステーションと小学校十校を巡回しています。

新総社市は、平成十七年三月二二日に、近隣の清音村・山手村と合併し、人口が約一万人増え、約六万八千人となりました。平成十二年七月から総社圏域の真備町・清音村・山手村は「総社圏域図書館・図書室相互利用制度」により、相互に図書館・図書室を利用してまいりました。しかし、清音村・山手村が本市と合併し、真備町が平成十七年八月一日に倉敷市と合併したため、平成十七年六月末日をもって図書館の広域利用は解消となりました。以前から清音村には図書室はなく、山手村には公民館図書室が設けられていたため、新総社市においては市図書館・山手公民館図書室の二館体制となっています。合併時、市図書館と山手公民館図

書室とのシステムを統合し、オンラインで結び総合的に運用する計画でした。しかし、現在も未着手であり、今後、電算システムの統合を図り、それに伴う「物流搬送システム」や「サービスの統一化」なども考慮しながら、統合について検討する必要があります。

本市の図書館サービスは、合併時に清音村・山手村で実施されていたブックスタート事業も導入し、児童奉仕の部門については、活発なボランティア活動にも支えられ、高い水準にあると自負しております。しかし、それに比べ郷土資料・専門図書 の少なさ、レファレンス機能の強化の必要性という課題を抱えております。人員的にも財政的にも厳しい状況ですが、指定管理者制度の導入の是非も見極めながら、市民に役立つ・身近な図書館を目指し、職員一同努力をする必要があります。

懸案であった駐車場の増設用地の取得ができ、来年度造成・整地を行い、利用に供する予定です。これを契機に、開館以来二五年が経過し、老朽化している図書館設備の更新も行いながら、図書館利用者の利便性を高めて行きたいと考えております。

(総社市図書館 小田求)

●高梁市

平成十六年十月一日、旧高梁市は

市町村名	合併前名称	合併後名称
倉敷市	倉敷市立中央図書館	倉敷市立中央図書館
	倉敷市立児島図書館	倉敷市立児島図書館
	倉敷市立玉島図書館	倉敷市立玉島図書館
	倉敷市立水島図書館	倉敷市立水島図書館
	船穂町立図書館	倉敷市立船穂図書館
	真備町立図書館	倉敷市立真備図書館
笠岡市	笠岡市立図書館	笠岡市立図書館
井原市	井原市立図書館	井原市井原図書館
	芳井町立図書館	井原市芳井図書館
	美星町中央公民館	井原市美星図書館
総社市	総社市図書館	総社市図書館
高梁市	高梁市図書館	高梁市立中央図書館
	成羽町立図書館	高梁市立成羽図書館
新見市	新見市立図書館	新見市立新見図書館
	哲西町図書館	新見市立哲西図書館
浅口市	鴨方町立図書館	浅口市立鴨方図書館
	金光町立図書館	浅口市立金光さつき図書館
	金光図書館	金光図書館
早島町	早島町立図書館	早島町立図書館
里庄町	里庄町立図書館	里庄町立図書館
矢掛町	矢掛町立図書館	矢掛町立図書館

* 合併後の備中地域公共図書館

上房郡有漢町、川上郡成羽町、川上町、備中町の一市二郡の四町が合併して新高梁市となりました。

岡山県中部に広がる新市となり、人口は三六、六九四人（平成十八年十二月末日現在）、面積五四七・〇一km²です。

合併により、図書館は二館となり名称を変更しました。旧高梁市を高梁市立中央図書館、成羽町立を高梁市立成羽図書館とし、地域の館として単独運営をしています。また、各町の図書室は有漢図書室、川上図書室、備中図書室として引継ぎました。有漢町については、生涯学習センター内に図書室を設け充実を図りました。また、備中町については、合

併と同時に県立図書館の支援もいただき図書室オープンとなりました。

コンピュータシステムは中央館のみで、成羽図書館については、カード式になっています。また各町の図書室においても同様です。

各館（室）の利用については、市民はどこでも利用できますが単独でしているため、それぞれの利用方法でなければなりません。現在、共通カードはありません。

返却については、どの館（室）で返却しても良く、その物流便は、市役所、教育委員会の連絡便（本庁と地域局との物流便）でそれぞれのところへ送付しています。

将来的には、宅配便の利用なども

検討し、広範囲の利用が出来るようにしたいと思います。

移動図書館車の活動については、旧高梁市で行っていた、毎月定例で四回巡回していた従来ものに有漢町川上町、備中町を新たに加えました。成羽町については、独自の軽四ワゴンの改造車「うぐいす号」で成羽町内の移動と配本活動を毎月二回巡回しています。

図書館の今後の課題としては、共通カードの発行、また、合併により非常に広範囲となった市全体への図書館サービス、配本サービス等を全地域に広げていくことを考えなければなりません。各地域の館（室）への支援、公民館図書室への配本サービス等、さらに大学等も含めた学校との連携についても今以上に充実に図りたいと思います。

図書館として課題はいくつもありますが、市民にとって重要な情報源となるように、努力していきたいと思えます。

（高梁市立中央図書館 山下晴夫）

●新見市

新見市は平成十七年三月三十一日、旧新見市・大佐町・神郷町・哲多町・哲西町が対等合併して人口三七、〇四九人、面積七九三・二七km²で誕生しました。位置は岡山県北

西地域の広島県・鳥取県に隣接する山間部にあり、少子高齢化が進み、徐々に人口が減少しています。

合併により新見市立新見図書館と新見市立哲西図書館の二館でスタートしました。その他図書コーナーが大佐総合センター・神郷生涯学習センター・哲多総合センターにあります。哲西図書館は平成十七年三月一日付けでNPO法人に移行し、大佐・神郷は合併前に各センターを建設して図書コーナーを設置するなど、それぞれ地域の特徴を生かした図書館運営を展開しています。

電算システムのネットワークについては、哲西図書館と大佐・神郷の図書コーナーは市内ネットワーク化と岡山県図書館横断検索システムへの参入を合併前の二月一日に完了していますが、新見図書館は二点ともシステム構築化ができておらず、何時実現するか見通しは立っていません。図書館運営面においては、開館時間や冊数制限などは、地域性を優先し統一していません。移動図書館車の運行については、旧神郷町・哲多町・哲西町の小学校へも巡回していますが、平成十八年四月より、利用の少ない一般駐車場巡回の運行を休止し、岡山県立図書館の週二回の搬送便に合わせて午後配送するシステムをスタートさせ好評を得ています。

児童図書は、神郷、哲多町の小学校から借りられています。出張おはなし会については、神郷、哲多、哲西町の小学校などから申し込まれるようになりました。ブックスタートについては、年八回から毎月一回の実施となりました。

合併以後、市内図書館施設等の連絡会議を開催するようになり、昨年十一月下旬にやまびこ広場神郷で開催された一日こども図書館フェスティバルでは、より協力して開催することができました。また、移動図書館車の巡回学校の増設、市内週二回配達便システムで、より広範囲なサービスが可能となりました。今後、連絡会議を開催しながら、より利用しやすい図書館を目指して行きたいと思えます。

(新見市立新見図書館 福意昭教)

●浅口市

平成十八年三月二一日、浅口市は旧金光町・鴨方町・寄島町の三町の合併によりスタートしました。岡山県の南西部に位置し、合併時の人口は三八、四二九人、面積六六・四六km²と、こぢんまりとした市ですが、北は遙照山系を含み、南は瀬戸内海に接し、変化に富んだ自然と地形を有しています。

図書館としては、金光図書館・浅

口市立金光さつき図書館・浅口市立鴨方図書館の三館があります。それぞれの館の様子を簡単にお知らせします。

〈金光図書館〉

金光教経営による昭和二二年開館の歴史のある図書館です。蔵書数約二十万冊、展示図書も一万五千冊あります。宗教図書館としての特色をもっていますが、教団内にとどまらず、地域社会一般の方にも貴重な資料を利用していただけるように、広報活動の充実に努められております。

〈浅口市立金光さつき図書館〉

金光町立図書館として平成十五年に開館した新しいきれいな図書館です。浅口市金光公民館の中に増設されました。そのため公民館の行事があるたびに多くの親子連れが図書館に立ち寄っています。公民館との併設の利点だと思えます。

〈浅口市立鴨方図書館〉

昭和五八年に鴨方町立図書館として開館しました。文学と児童書や絵本が多くあります。天草公園の一面にあり、静かな環境の中に建っています。

〈市立図書館二館の連携〉

中央館・分館というのではなく、対等な形で合併しました。それまでは別々であった、開館時間・閉館時間及び貸出冊数を統一しました。貸

出し可能な地域が新市となり、両館とも広がりました。市の在住者・在勤者・在校者及び里庄町の在住者となりました。

隔月に一回、月末整理日の日に一時間、十二人の職員全員が参加して合同職員会を開いています。二館合同で市内の小・中学校の司書・図書担当者をして連絡会を開催しました。

二館の緊急の課題はシステムの統合です。遅くとも、二十年度の開始をめざして、準備をしているところです。

(浅口市立鴨方図書館 村上良三)

☆個人会員の紹介☆

成長する学園図書室

金光学園中学校 藤井教子



キーン コーン カーン コーン 四時間目終了のチャイムが鳴り終るや否や、ガラッとドアが開き、生徒が飛び込んで来る。

「先生。あの本、返って来た？」

「返って来てよ。はい」「やったあ！ありがとう」

と、予約本を手に安心して、昼食を食べにクラスに戻って行く。第一陣の馴染の生徒たちが数名、慌しく貸出・返却の手続きを済ませ、図書室を出て行く。

三分間程の静寂の後、ガラッ。

「ドアが少し閉まっていないから、さちつと閉め……」と、言い終らないうちに次の生徒が入って来る。

「どどん入って来る。返却本の処理をしながら「T君、この本どうだった？」とか、「Uさん、次の巻があるけど読む？」などと声かけしつつ、本を手渡す。気が付くと、カウンターのまわりに人垣。「おもしろい本はありませんか？」と聞いてくる一年生。「うーん。おっ。いい所にO君がいた。O君、F君に君のおすすめ本を教えてあげてよ」と、高一に中一の生徒を託す。書架の前で話を始めた二人を目の端に入れ、

「もお！先生、聞いてよ」と、話しかけてくる生徒に耳を貸しながら、貸出・返却に勤しむ。あまり大きくない図書室は、満員御礼の状態にすぎなる。本や新聞、雑誌やマンガを読んでいる・本を探している・本談義をしている・ただ何となく、いつも図書室に来る・友達について来る・話を聞いてもらいたくて来るな

ど、中学生に限らず、高校生も多くやって来る。中高生入り乱れて、何とも賑やかな昼休みの中学図書室。キーン コーン カーン コーン 「おいしい。チャイムが鳴ったよ。速く、速く！」

「えっ。もお？もう少しで読み終るのにー」

「また放課後に。ねっ」

と、五時間目に間に合うように送り出す。そして、私は図書カードを持ち、デスクのある高校図書室に戻る。私の勤務する金光学園には、中学と高校にそれぞれ図書室があり、司書も一名ずつ配置されている。高校図書室は機械化されているが、中学図書室は移行中のため、別のパソコンに図書カードを見ながら、手作業で入力している。

生徒は、どちらの図書室も利用できるので、図書室が二つあるのは、とても便利である。というのも、当然のことながら、蔵書構成が違うからである。例えば、今では避けて通れない「ライトノベル」。中学図書室にしか入れない。余談だが、近辺の図書館に、学園図書室にある程の本が揃っていないのが実状である。このライトノベルの出版たるや、凄まじい。生徒は書店に足繁く通い、情報を入手し、リクエストしてくる。私は休日に、購入希望票を握りし

め、大型書店の椅子に座り、蔵書にするか否か見極めるため、何冊も何冊も読む。ある時は、ほしい本を求めて、何軒もの書店をハシゴする。

「この本は入れたのに、あの本を入れなかったのは、どうして？」と、問う生徒に対して、私はきちんと答えることで信頼関係を築く手立てにしている。表紙、さし絵、キャラの設定、セックス描写、暴力描写など、問題点を説明する。「やつぱり」と、生徒も分かっているらしく、納得するのだ。そんな問答を繰り返しているうちに、生徒の方も選書基準があるということに気付き、自分で買う本とリクエスト本を、ちゃっかり別けるようになるからおもしろい。

「この本は、私がリクエストして入れてもらったのよ。おもしろかったよ」と、うれしそうに話すMさん。すると、Kさんがその本を借りていく。そうやって人から人へ、本が読まれていく。

「あの本の新しいのが出とったよ」と、情報を教えてくれる日君。

「ああ、その本だったらもう入っとる。只今貸出中」と言うと、「早いなあ。さすがじゃ。僕も予約する」という日君の声に、まわりの生徒も先を争って予約票を書いてくる。最近の子どもは、本を読まなくなったと言われるが、さに非ず。い

きいきとして、いろんなジャンルの本を読む生徒たちを見ていると、司書冥利に尽きる思いがする。読みたかった本を手にした生徒の笑顔に支えられ「よし！この子たちの読みたい、知りたいをバックアップするぞ」と、日々思いを新たにしているのである。

生徒がいなくなった図書室の書架の前にたたずみ、乱れ具合を点検。一目でその日の状況が把握できる。生徒が来る前に、常に書架の整理整頓をしているからである。それは、以前勤めていた金光図書館時代に培われた習慣のおかげである。本があり、司書がいても、利用する生徒がいなくては始まらない。生徒が手に取った本から、明日の図書室が始まる。そこに、私がいる。ランガナータンの五原則の一つに、【図書館は成長する有機体である】とある。学園図書室も、大いに成長していきたいものである。

岡山県図書館協会活動報告

【事業報告】

十二月十一日(月)

図書館業務講習会

「図書館サービスのアウトソーシングと図書館の未来」(参加五十六名)

講師・山口 源治郎 氏

(東京学芸大学教育学部教授)

二月二十八日(水)
製本講習会(参加四十六名)

講師・高尾 齊 氏

(キハラ株式会社)



今年も製本講習会には多くの参加をいただきました。今回は通常の製本以外に皆さんのご要望により、破損資料の修理も行いました。日常業務に役立てていただきたいと思います。

平成十九年三月三十一日
〒七〇〇一〇八二三

岡山市丸の内二一六―三〇

岡山県立図書館

メディア・協力課 図書館協力班内

岡山県図書館協会

会長 渡 辺 真 道

(〇八六) 一三四―一二六九